

日本に生まれ、大学入学まで一度も日本以外で生活をしたことのなかった私にとって、今回の留学が初めての「海外で長期間生活をする」という体験であった。いうまでもないことではあるが、およそ半年間のこの生活の中では、事前に予想していたよりは日本社会との隔たりが大きくなかった経験、全く予想もしていないところで異文化に足を掬われた経験など、思い出すだけであつという間に時間が過ぎてしまうほどの多様な体験をした。この欄をお借りして、自分が北京でどのような講義を受講したのかについて記述していきたい。

まずは、受講した講義について、箇条書きで列挙する。

- ①【中国政治と公共政策(Chinese Politics and Public Policy) /国際関係学部(国際関係学院) /月 5・6・7 /英語 /40 人程度】
- ②【中華人民共和国対外関係(中华人民共和国) /国際関係学部(国際関係学院) /火 1・2・3/中国語 /100 人程度】
- ③【漢語学術論文(汉语学术论文) /水 5・6/中国語 /30 人程度】
- ④【中国概況(中国概况) /水 5・6 /中国語 /10 人程度】

続いて、受講した科目についての所見を詳述する。私自身の半年間の振り返りとなるため、お読みいただくのに骨が折れることになるかもしれないことを初めにお断りしておく。

まずは月曜日に受講した”Chinese Politics and Public Policy(通称 CPPP)”についてである。CPPP は全講義を通して英語で行われ、受講者は中国人の本科生と外国からの留学生がちょうど半分ずつほどという割合であった。国外からの受講生が多いということもあり、過度に専門的な学問分野を扱うというより、中国政治の概要を広範囲にわたって概説するといった、いわゆる”広く浅く”型の講義内容であった。担当教員はアメリカでの教授経験を持つ 40 代の男性教員で、彼の持つ現代中国政治に対する独特な視点や在米生活がもたらした特有の批判精神は、ともしれば政府の視点一辺倒に偏りがちな中国政治の授業において、複数の立場に立脚して物事の本質を捉えることができる講義内容であり、満足度の非常に高い講義であった。講義形式に関しても、40 人を越す大所帯のクラス編成であるにもかかわらず、教授から生徒への一方通行のコミュニケーションではなく、頻繁に生徒に対して意見を求め、生徒からの質問を積極的に受け入れるという、講義内容への理解をより深めることができる授業形態を取っていた。初回の講義の際には教授自らが、「世界各地から来た生徒たちから学ぶことが多いため、自分自身も 1 人の生徒であり、受講生からの積極的な質問や意見表明を歓迎する」旨の表明を行い、緊張とともに初回の講義に臨んでいた生徒たちの姿勢をほぐすことができていた。授業内容は、先に述べた通り、国内政治に関わる広範囲の分野を取り扱った。

下記に各回の授業タイトルを示す。

Introduction and Methodology for Researching Chinese Politics (2 月 18 日)、
Legacies and Diversity(2 月 25 日)、
From Revolution to Development(3 月 4 日)、
Political Drivers of Economic Change(3 月 11 日)、
The Chinese Communist Party(3 月 18 日)、
Local Autonomy under Central Authority(3 月 25 日)、
States and Society(4 月 1 日・8 日)、
Decision Making in an Authoritarian Regime(4 月 15 日)、
Contemporary Critical Social Issues in China(4 月 22 日)
Nationalism(5 月 6 日)、Ethnicity and Identity(5 月 13 日)、

Cyberspace and Censorship(5月20日)、
China Faces the Future(5月27日)。

ご覧いただいておりますように、実に多岐にわたる専門分野である。これだけ多彩な分野を担当され、しかも各回の講義では決して生徒を飽きさせることのなかった教授に対しては、ただ頭がさがるのみである。授業中の質問のみならず、授業後の質問でも嫌な顔ひとつせず丁寧に対応してくださり、生徒としても積極的な参加を促される思いであった。この講義の評価基準は3点であった。1点目は出席と参加態度である。この講義においては毎回の授業へ出席することが求められており、積極的な授業参加態度が歓迎されていた。隣席の韓国人の学生などは、ほぼ毎週授業後に教授の元へ行き質問を行っており、その知的探究心に対して敬服するとともに、3時間を超える講義を聴講したのちに質問に行くという行為を毎週続けることができる精神的な強さに感嘆させられた。私も積極的な授業参加を心がけていたため、授業内での質問に対する回答はもちろんのこと、講義中に気づいた疑問点や、講義とは直接関係ないものの中国政治に関する質問などを見つけては直接教授の元へ赴いて質問と議論を行っていた。2点目の評価基準は、プレゼンテーションである。毎週の講義において、最初の30分程度がプレゼンテーションの時間として割り当てられ、各回の授業内容に関するプレゼンテーションをグループで行っていた。私の所属するグループが選んだ内容は、上記4月15日のDecision Making in an Authoritarian Regimeであり、その中で建国以降の中国歴代指導部における最高意思決定プロセスの変遷に関する部分を担当した。世界各地からの留学生とともに中国国際政治の様々な論点を議論しまとめた上でプレゼンテーションとして発表するという体験は、海外での活躍を目指す私にとってまたとない機会であった。3点目の評価基準は、期末試験である。およそ4ヶ月間の間に習得した内容全般に関わる論述問題で、試験時間は2時間であった。受験前は2時間の試験時間が長く退屈であると考えていたものの、試験が始まってみるとその内容の多さや検討する事項の複雑さなどから、2時間ですら十分ではないと感じるようになった。

幸いにも、試験のための準備を怠らなかつたこともあり、最後まで問題を解ききることができた。

建国以降の中国歴代指導部における最高意思決定プロセスの変遷に関するプレゼンテーションを行う様子



次に、火曜日の中華人民共和国対外関係についてである。この講義は国際関係を専攻する一般の学生のために開講され、留学生に対しても解放されているクラスの一つであり、当然のことながら全編を通して中国語で講義が行われた。中国語を学習して一年に満たない私にとって講義に遅れずについていくのは至難の技であったが、幸いにもスライドに記載されている文字から概要を把握することはできた。この時ほど義務教育課程を通して漢字教育を受けてきたことに感謝した瞬間はなかった。他国からの留学生は皆、幼児から漢字を学習した経験がないため、彼らにとって漢字は全て成長してから習得した外来の文字である。それに対して日本人にとって漢字は言語の習得に並行して学ぶ文字体系であり、母語において日常的に使用している文字の種類である。書かれた文字の便宜性に関して感謝の念が絶えなかった。この講義は国際関係学院の教授が担当しており、毎週3時間の授業を火曜日の午前中に受講するというのは、苦行に等しいものであった。ある時などは、教授自らが2時間ほど遅刻してしまい、微信(中国において使用される、LINEと同様の機能を持つチャットアプリ)上に置いて謝罪した上で遅刻して到着、その後通常と変わらない授業分量を早口で喋り続けるものの当然規定時間内に終わるはずもなく、昼休みの中ほどになってようやく講義が終わる、という回もあるほどであった。その日に限って朝食を食べずに授業に参加した自分は、大変閉口させられたことを覚えている。本講義の内容は、建国以降の中華人民共和国の歴史の中で、外交方針や対外関係がどのような変遷を遂げてきたのか、世界情勢が複雑に変化する中で中国政府はどのような対外政策を打ち出してきたのか、という内容である。今学期受講した様々な内容の授業の中で、最も私の専攻内容に近いものが多い講義であった。講義形態は、100人前後の大人数が受講する形態で、先述の国内政治に関する講義とは対照的に壇上の教授が一方向的に発言し、生徒はその内容を一心不乱に記憶していく、という内容であった。

具体的な講義内容は、以下の通りである。
中国外交基本動力(2月19日)、

新中国对外关系的缘起和发展(2月26日・3月5日)、
发展与波动的十年(3月11日・19日)、
“反帝必反修”(3月26日・4月2日)、
三个世界与反霸(4月9日・4月16日)、
对外开放与独立自主(4月23日・5月7日)、
韬光养晦与有所作为(5月14日)、
和平发展与和谐世界(5月21日)、
和平发展合作共赢(5月28日)、
进入新时代与建构人类命运共同体(6月4日)。

授業の評価基準は2点であった。1点目はインフォグラフィックの作成である。受講生全員が3人から4人のグループを作り、与えられたテーマに沿って情報図を作成するという課題であり、中間試験に代わって課された課題でもあった。私たちのグループに与えられたテーマは、昨年後半に北京で開催された中国アフリカ協力フォーラムに関してであった。もとより発展途上国への経済支援、特にアフリカサブサハラ地域への開発援助に対して感心を抱いていた私にとってこのテーマは非常に興味深いものであったため、全力で課題を仕上げることに集中した。2点目の評価基準は、期末試験である。中国人学生に混じって通常のテストを受験するというのは心理的な負担の大きいことであったが、重要な経験になったことは間違いない。

続いて、同じく火曜日に受講した学术论文写作についてである。この講義は留学生向けに開講されているものであるが、対象は高度な中国語運用能力を持つ学生となっており、実際に受講していた友人たちも皆高度な中国語能力を持つ生徒ばかりであったため、授業に追いつくのに骨を折った。講義内容は、学術的な論文を中国語で作成するにあたり、注意すべき点や実用的なアドバイスなどを行うというものである。毎回の講義に先立ち、課題として講義該当部分の論文を作成して提出した。例として、序論に関して講義を行う前の週に、実際に序論に関して自力で論文を書くといった内容である。今学期受講した講義のうちで最も課題の多い講義であった。評価内容は3点である。1点目は毎週の課題である。指定のメールアドレスに、各週の課題を送付した上で、TAの学生や教授からの添削を受ける。2点目は、中間試験である。中間試験は、論文を書く際に一般的に必要とされる作法に関しての質問であった。3点目は、最終的に完成した論文の内容である。論文の内容は各自の選考によって自由に選ぶことができ、私は国際関係が選考であることから、北朝鮮に対する国連制裁と中国における制裁の実行状況というテーマで論文作成を行った。最終的な字数は6,000字を越え、中国語を用いてこれだけの分量の論文を記述したことはかつてなかったため、大変意味のある経験となったとともに、中国語における国際関係の専門用語についての知識を広める機会ともなった。

最後に、水曜日に受講した中国概況である。この授業も同様に、留学生向けに開講されている授業であるが、やはり対象が高度な中国語運用能力を持つ学生となっており、実際に受講していた友人たちも皆高度な中国語能力を持つ生徒ばかりか、台湾からの留学生が半数近くを占めており、彼らの中国語運用能力は母語同様であることからして、授業への参加が困難な授業の一つであった。しかしながら一方で、担当講師の教諭は外国人にわかりやすく中国語を話す能力に長けた人物であり、この講義において自分の中国語能力に最も自信を持つことができたと言っても過言ではないかもしれない。というのも、授業においては教授が積極的に生徒に対して意見表



中国概況において文化大革命期の文化芸術に関するプレゼンテーションを行う様子

明を求め、教授が生徒の意見を聞き取る事に巧みなのである。自らの伝えたいことが見事に相手に伝わるというのは、留学先の中国ではあまりなかった経験であったため、非常に感謝の念にたえなかった。授業内容は、中国概況という科目名の通り、中国に関する概況を紹介していくという授業であった。内容は人文科学に限定することなく、社会科学や自然科学に関わるテーマを取り上げることもあり、授業内容の多彩さに感銘を受けた。また、一方的に教授するのみならず、先述の通り生徒への意見表明を頻繁に求めるため、授業に最も集中力が求められる科目の一つであった。例を挙げるとするならば、伝統宗教に関する講義の際に、儒教や道教などの伝統宗教を一方的に教授するのみならず、現代中国社会に残っている授業の影響について学生に意見を求め討論させるなど、中国語の実用能力向上という観点においては最も有用な授業であった。



中国概況で、友人と共にフィールドワークを行い博物館を見学する様子